

1996年の本。

6 銃弾の味

緑のあるヤクザの依頼で、京都の土地開発にかかわることになった。依頼の筋はスムーズに進展したが、最後に金の授受をめぐる揉めた。レストランでの談判の席に、二人のヒットマンが乱入した……

7 野郎どもとバブル

妙ないきさつで、神田神保町の「東洋キネマ」を地上げすることになった。時まさにバブルの最盛期。名代の悪党どもが群がり、札幌とドンペリの日々——。私はバブルのど真ん中にいた……

8 葬られてたまるか

暴対法が浮上してきた。若手官鎌は「ヤクザ根絶」と息巻き、古手官僚はヤクザを排除してパチンコ業界などの利権化を狙っていた。ふざけるな！ 「ヤクザ」の間獲を軽く扱われてたまるか……

「会場に突入して、わごほうの連中を救出してくれ。できるか？」

田熊が心配そうに私に訊いた。それを聞いて、なにを中途半端で体裁のいいことをいってるんだ、と思った。党派闘争の現場では、それが理論闘争であれ武闘であれ、敗けることはそのまま組織の衰退につながっていく。救出などという生温いことではなく、敵を会場から叩き出してやろうと思った。「救出するも何も、やられてるのなら、やり返さなければしょうがないじゃないか」

まず、長期ストで操め事馴れした早大の活動家を一人会場に派遣して、相手の人数、相手のもつ武器などを偵察させることにした。その一方で、武器の調達にかかった。ちょうど明治記念館の隣が工事中で、材木や礎石などの建築資材が野積みされていた。そのなかから手頃な杉材をかつぱらってきて、とりあえずの武器とすることにした。そうこうするところへ、法大と中大の二部の民青系活動家六〇～七〇人が、急を聞いて駆けつけてきた。こちらの人数は一〇〇人近くにふくれ上がった。

法大と中大の連中にも武器をもたせて、なんとか突入の態勢が整ったところに、偵察に行っていた早大生が駆け戻ってきた。その報告で、新左翼系の数は一五〇から二〇〇人。その半数くらいがヘルメット、棍棒、それに鉄パイプのようなもので武装しており意気軒昂としていること、各派間の協力態勢もうまくいっているようでかなりの難敵であること、会場は内側からロックされていて外から扉を開けるのは難しいこと、ただ内部の民青と連絡はとれること、等がわかった。

相手が鉄パイプまでもっているとなると、簡単に折れる杉の棍棒ではどうも対抗できない。そこで再び工事現場に行って武器になりそうなものを物色したところ、ひと抱えあろうかという巨木が一本横たわっていた。試しに何人かでもち上げさせてみると、三人がかりでようやく運べるというシロモノだった。この巨木が有効な武器となるかどうかは疑問ではあったが、相手の度胆を抜くことくらいはできるだろう。そう考えてもって行かせることにした。

こうして、ようやく突入の準備が整ったのは深夜も一時近くになった頃であった。そこで、突入

前にそれなりの作戦を立てた。ひとつは、私の率いる五〇人と平山の率いる五〇人の二派に分けたことである。その二派が別々の扉から乱入する。さらにその乱入に時間差をもうけることとし、まず私のグループが先に乱入して相手の正面に突っ込んで乱闘する。その数分後に平山のグループが乱入し、相手の脇腹を衝く。つまり T 字型に時間差をもうけて乱入し、挟み打ちにすることにしたわけだ。

子供の頃から喧嘩ばかりしてきたおかげで、喧嘩上の戦術にはいささか自信があった。人の塊と塊がぶつかり合う場合は二派に分けた側が絶対に勝つ。正面から敵に突っ込むグループには犠牲が多くなるが、一時それに耐えれば必ず勝つものなのだ。さらにいえば、グループがぶつかり合う場合は最初は双方が呪み合う場合が多い。その際は先に突っ込んだほうが勝つ。突っ込まれた側は相手の気迫に押されてどうしても後退することになり、その後退を挽回することは非常に難しい。

もうひとつの作戦は、棍棒で相手を突かせたことだった。当時のゲバルトは両派とも長い棒をもって叩き合うというものだったが、どうしても恐怖で腰が引けるためにさほど効果はない。そこで強引に接近戦にもち込んで、相手を突かせることにした。もっとも、ヤクザの喧嘩ではないのだから、顔は狙わず腹部を突かせることにした。こうした作戦を立て終えたところで、全員に小石を三つずつもたせた。そして、

「突入したらまず石を投げろ。投げ終わったらただちに突っ込め。至近距離まで突っ込んで、相手の腹を突け。絶対に退くな、退いたらやられるぞ」

と簡単に指示した。こういう場合、指示は単純なものでないと効果がない。

一時を少しまわった頃だったかと思う。扉が内側から勢いよく開かれたのを合図に、まず私のグループが会場になだれ込んだ。五〇人は例の巨木を先頭に押し立てて、新左翼系の占拠する演壇に向かって真っ正面から突っ込んでいった。不意の乱入に新左翼系は驚き、さらに得体の知れない巨木を見て呆然としている。

その間隙をついて五〇人が一斉に石を投げると、新左翼系の連中は顔を伏せて頭を手でかばう。そこへ巨木を運ぶ五、六人を除いた全員が突っ込んでいった。石つぶてに続く突撃で相手はドドッとひと塊になって後退していったが、それでも四、五人は踏み留まって鉄パイプを振りまわしている。その鉄パイプでこちらの何人かが殴り倒された。

だが、結局はその鉄パイプの連中を突き倒して、新左翼系の連中をさらに後退させていった。そこへ平山のグループが別の扉から乱入したため、新左翼系は会場の片隅に押しやられた形になった。

もちろん、武闘馴れした新左翼系がやられっぱなしだったわけではない。途中から猛然と反撃に転じ、大乱闘となった。こちら側も相当なダメージを受けた。私も顔面を棍棒で殴られかなりの血を流した。しかし、不意をつかれた新左翼系のほうに最初から大きなハンデがあるため、挽回するまでには至らなかった。結局、新左翼系の連中全員を会場から追い出した。その後は議事はスムーズに進行、執行部案が一八九対〇で可決され、新委員長に東大駒場寮の藤本斉が選出された。

こうした暴力行使に対して、当然のことながら非難が起った。だが、早大の新左男系の連中は、暴力沙汰はお互いさまだということもあって、「京都の暴力団」などと笑止な非難はしたものの、尾を引くこともなかった。問題はむしろ民青の内部であった。

通常、どこの会社でも経理担当者が手形の決済リストを作成し、その都度会社の役員や経理の責任者の判断や了解を得ながら手形を決済している。京都に帰って寺村建産に最初に顔を出したその日に、経理の担当者が手形の決済リストをもってきた。

「なんや、これ？ こんなに決済せないかんのか」

私は思わず、頓狂な声を上げた。リストには三〇ほどの支払い先と金額等が記入されており、金額も一〇〇万単位のものばかりである。「総額でなんぼ支払わんならんのや？」と訊くと、二〇〇〇万円ほどだという。「ほな、払るといたらええやないか」というと、経理の者が困惑の表情で「それが……銀行の預金が見つきつななんですわ」と答える。「支払いの金がないんか?!」私は思わず身を乗り出した。

話を聞いてみれば、自転車操業もいいところであった。毎日まわってくる手形を、借金したり手形を割ったりしてなんとかかかろうじて決済している有様だった。帳簿をもってこさせて見てみると、まさに綱渡りの連続であった。有金をかささうようにして、日々の決済を行っていた。

そうかと思うと、旅行名目で四〇〇〇万円近い支出があったりする。社員を大勢引き連れてヨーロッパ旅行をした経費で、飛行機はファーストクラス、ホテルも超一流の豪華な部屋に泊まり、さんざん豪遊したらしい。社員には小遣いも奮発したという。経費はもちろんすべて会社持ちである。金まわりのよかった時期のことではあったのだが、蕩尽ぶりはもう無茶苦茶というほかなかった。

土木建設の世界は、世間に較べるともともと金遣いが荒い。それに加えて、寺村建産はヤクザがつくった会社であるから、**そもそも節約とか安定経営とかの発想がない**。親父にしても兄貴にしても、常にイケイケドンドンの場当たり主義で、儲かればばつと使い、儲からなくとも「節約？ そんな格好の悪いことができるか」のやり方なのである。社員にしても、呑む打つ買うが専門のような連中ばかりだった。

内田の社長の例は極端であるにしても、権威や権力に拠ることなく自前で生きている人間がまだ残っている。権威や権力に拠ることなく生きるのは実はなかなか難しい。何事も自らの手で闘い取らなければならないからだ。だがそれを、いとも簡単に当たり前のようにやってのける人間がいる。自前の「法律」に則って生きる、真にタフな人間がまだ棲息している。

そして、この種の人間には、今の市民社会で薄れてしまった筋目や情、それに侠がある。苛烈に闘

いながら自己実現を達成するその一方で、一銭にもならない他人事で奔走したり身体を張ったりするのである。知的教養には欠けるが、そのぶんだけ人間的な魅力に富んだ人物が多いのだ。

これはヤクザの世界でもいえることである。ヤクザの世界は、三つの言葉を知っていれば渡れる。

「イモを引くな」「クンロクを入れる」「往生する」、この三つである。

「イモを引くな」とは、切所に立ったらびびるな、ということ。「クンロクを入れる」とは、相手の動揺する心にとどめを刺すこと。ヒットマンを説得するときなどもクンロクを入れるという。かつてのわが家でも、「お前も男やろ。しゃきっとせんかい！」などという言葉をよく聞いた。そして、「往生する」とは、苦境に立ったとき、自らにふんぎりをつけること、負けを潔く受け入れることである。これは、自分を捨てることにつながる。

びびるな。相手の心にとどめを刺せ。自分を捨てる。これだけを実行していけば、ヤクザとして生きられる。いや、これは、およそ自立して生きていこうとする人間に共通する行動規範ではないのか。にもかかわらず、私は、切所でびびり、相手に妥協し、自分を捨てきれない人間たちを、どの世界においても見すぎてきた。だからこそ、内田の社長のような生き方に強く共感するのである。

尾崎清光

尾崎のまわりには官庁や地方自治体から引き抜いた実務に練達した役人上がりが大勢いたし、政治家や財界人から極秘情報や調査資料も流れてきた。それに、尾崎自身が異常なほどの調査魔だった。政治家から国有地払い下げや大型公共事業計画の情報を得ると、関連する土地の登記簿謄本や公図を片っ端から取りよせ、仕事部屋にこもりきりで徹底的にアラ探しをやる。もちろん自分で現地へ出向いて実測したりもする。

たとえば、被差別部落に JR の引き込み線があって、そこに開発計画がもちあがったとする。と、尾崎はその土地の公図と実際の土地を照らし合わせて、記載と実測に齟齬がないか徹底的に調査する。公図というのは案外にいい加減なもので、実測すると公図と実際の土地の大きさに違いがある場合が多々ある。これを「縄緩み」「縄縮み」などと称するのだが、そうなる空白の未登記の土地が生ずることもある。

これを発見するや、尾崎はただちに**自分名義で登記し、開発計画が始動するまで何年でも待つ**。そして、いざ始動となった段階で、JR や所轄官庁の大幹部のところに乗り込み、猛然と恫喝し脅す。

「お前ら、わしに何の相談もなく、勝手に開発計画を立案しやがって、わしを差別してなめとるのか、こらっ！ ことと次第によったら、ただではすまさんぞ！」と怒鳴りちらし、椅子を放り投げる。そしてその後は、一転して法令をめぐる理詰めへの応酬をやったりするのである。結局、JR は尾崎名義の土地を法外な値段で買い取らされることになる。

・・・

背後で人が動く気配を感じ、私は我に返った。振り向くと、拳銃を両手で突き出すように構えた同じ紺の戦闘服姿の若い男がこちらに向かってくる。岩丸組組員の村上秋広だった。これも福岡県田川市出身の鉄砲玉である。私は反射的に立ち上がり、

「止めえ！ こらっ！」と村上に向かって怒鳴った。

その瞬間、銃口から火煙が吹き出た。その火煙が突き刺さったかのように右腹部に途方もなく熱いものが走った。

切り裂かれ、灼かれる……銃撃されたときの感触は、そんな感じだった。銃口から火煙が吹き出した瞬間、腹部に切り裂かれたような激痛が足り、内部を熱いものが駆けめぐった。灼かれるような熱さだった。もっと具体的に表現すれば、火で真っ赤に灼いた中華料理用の肉厚の包丁をいきなり腹に刺し込まれた、といった感じだった。息ができないほど、熱く痛い。とっさに両手で熱い芯を押さえ、ソファに腰から崩れ落ちた。指の間から血が噴き出していた。

血を見ても、気が動転するようなことはなかった。「拳銃で撃たれるとは、こんな感じのものなのか」「俺もこれで死ぬのか」といった漫然とした思いが頭のなかを流れていっただけだった。人間、ドタン場では意外に淡泊になるものらしい。

・・・

福田、矢島、若い社員らを見ると、テーブルの下に潜り込んだりソファにつっ伏したり、金縛りにかかったように背を直立にして不動のままだったりであったが、全員真っ白な顔をひきつらせている。その顔を見て、一刻も早くこの連中を連れてこの場から立ち去らなければならないと思った。すぐに警察が駆けつけてくる。その前に逃げなければならない、となぜか思った。

・・・

レストランの駐車場に停めてあった車に福田らを押し込め、私は車を急発進させた。そして、福田らを幸生総合建設近くに送り届けた後、そのまま東京に向かった。京都から一刻も早く離れることが今なすべき唯一のことだった。

京都南インターから名神高速に乗り入れて、ひたすら東京に向かって車を走らせた。追越し車線をすっ飛ばす。気がついたら、スピードメーターの針が一五〇キロを大きく超えたところで激しく震えていた。

・・・

東京が近づくにつれて、傷口を中心にして腹部が猛烈に痛み始めた。車を停めて傷を確かめると、**銃弾は右わき腹をえぐって貫通**していた。大した負傷ではないのに、とにかく痛い。ナイフで刺されたり切られたりしたときとは格段の違いだった。もし腹のど真ん中に撃ち込まれていたら……。想像するだけで背筋が寒くなった。

・・・

この事件のその後のことにも少し触れておきたい。私はそのまま車を飛ばしたが、横浜でついに力尽き、ホテルに投宿した。もう夜も深まっていた。そこから早大時代の後輩に電話すると、実業家として海外にまで手をのばして派手に活躍している多忙な身であったが、ただちにホテルに駆けつけてきた。この後輩の連絡で各界の友人たちも、仕事を放り出して駆けつけてきてくれた。

撃たれた傷であるから、医者にかかるわけにはいかない。それにわき腹をえぐり抜けただけの傷だから、医者にかかるまでもなかった。それでも、友人たちは店仕舞いしていた薬局をたたき開けて、クスリを買い込んできてくれた。胸が熱くなったぶんだけ、私は「こんな傷はオロナインをつけたら治る」などと粹がるほかなかった。

事件から四日後、伏見署に国場幸一、村上秋広が犯行に使用した三八口径の回転弾倉式拳銃をもって出頭した。そして、北本鉄也らを射殺したのは国場と村上であった、と自供した。

Aの収監で元請けを失った私は、今度は東洋機工の下請けとして東洋キネマの地上げを続けることになった。億単位の金が飛び交い、ドンペリやレミー・マルタンの匂いに包まれた日々であったが、周辺の動きを私はどこか醒めた目で見ていた。「こんな馬鹿なことがあってたまるか」という思いがたえず心のどこかにあって、燃えてくるものがなかったのだ。

ことに、銀行をはじめとする金融機関のなりふり構わない狂奔ぶりには馬鹿馬鹿しい思いを通り越して、「資本の側はここまでやるか」と呆れた。私が絡んだ東洋機工の場合はこうであった。

八八年といえば、バブルも陰りを見せ始めた頃であったが、それでも東洋機工の総務部には第一勧銀をはじめとする都銀、長銀、日債銀などからの出向行員が大勢いた。その連中が、巢のなかの子燕が餌を持ち帰る親燕を待ち受けるような必死さで、不動産を探しまわっている東洋機工不動産部の社員を待ち受ける。

そして、不動産部長のもとに社員が物件をもち帰るや、部長の机に二〇人ほどがどっと集まり、口々に「うちに融資させてください」と叫ぶ。関係者へのリポートも当たり前。連日、土地物件を担保にした金融機関同士の異常なほどの貸し出し競争が展開されていた。

融資額もいい加減なものだった。従来なら、土地の評価額の七掛けか多くて八掛け、つまり一億の土地なら、七〇〇〇～八〇〇〇万の融資である。しかも、担保を取ったうえに保証人をつけ、さらに決済方法を厳密に詰めた結果の話だったのだが、バブルの頃は話はまったく逆転していた。土地さえあれば金はいくらでも借りられ、融資のための審査などはつけ足しだった。それというのも、金融機

関がお手盛りの融資をやり続けたからだ。

まず、抵当権の評価をお手盛りにやった。当時の銀行マンたちの発想の基本は「この土地の適正な抵当権はいくらか」ではなく、「この土地の抵当権をどこまで伸ばすことができるか」だった。そもそも、抵当権は基本的に金融機関が設定するものなのだから、お手盛りでいくらにでも設定できるのである。適正な土地売買が行われるよう監視する国土法などの規制はあるが、実態はきわめてずさんなもので、政治的圧力もかけやすい。その国土法をうまくいじくりながら、一〇億の抵当権をあっという間に二〇億、三〇億に設定し直していた。

・・・

私にいわせれば、当時の金融機関は不動産屋の総元締めであり、同時に計画的・人為的な地価高騰のプロデューサーであり、土地を流動性の高い商品に一気に変えた張本人だった。その金融機関が最も執心したのは地上げしたサラ地であった。サラ地なら簡単に抵当権が設定できるからだ。

実際、金融機関の連中は「サラ地にさえしてくれるのなら、それに必要な金は全部出しましょう」「ビルを建てるのは止めて、サラ地のままにしときなさい。そのほうが売りやすいし、利益も上がる」ということばかりいていた。バブル期に日本中にサラ地が出現したのは、ひとえに金融機関のこの囁きのせいであった。

そこには、資本の中核としての社会への配慮や、ましてや社会的責任など毛ほども感じられなかった。「資本の側もこうまでなりふり構わず金に踊るのか」と呆れ、馬鹿らしく思えたものだ。

・・・

苦闘していた東洋キネマの地上げに曙光が見え始めたのは、着手から三年後の九〇（平成二）年のことだった。

二年がかりでアタックした挙げ句に「ここで死ぬ」といわれた琉球王朝の末裔の弟のほうへも、「そんなことおっしゃらずに」と日参して説得を続けていた。手土産は当たり前。新車のセドリックをプレゼントしたりしているうちに、ようやく立ち退きに応じる素振りを見せ始めたのである。

ところが、今度は立ち退き料を吊り上げようとして頑張りだした。兄弟の間で、立ち退き料をめぐる、意見の違いも出てきた。業界紙に勤める兄のほうはけっこうずるいタイプで、自分のためなら弟のことなどどうでもよくなっていた。そこで、私は「弟さんのほうの建物は値切って、兄さんの土地のほうを上積みしましょう」ともちかけ、兄のほうを落とした。兄から説得され、弟が渋々立ち退きに応じたのは九一年。実に五年がかりの地上げだった。立ち退き料は兄弟合わせて三億円。その後、**兄弟の間はこじれ、互いに内容証明で金を要求するようになった**そうだ。

私に立ち退き料を多く取ってくれと依頼していた K には、四億五〇〇〇万渡した。もともと左翼の運動家で、金にはまったく緑のなかった男がとんでもない大金を手にした。その後の顛末は、空港や原発に土地を売り、もち馴れない大金で身をもち崩した地方の百姓と同じだった。ただし、百姓の場合は女や博打にのめり込んで金も家庭もなくするケースが多いが、K の場合は違っていた。

K は四億五〇〇〇万のうち二億を株に投資し、五〇〇〇万を女房に渡した。ここまではよくある話なのだが、K のユニークなところは、残る二億円で、イラン革命で追放されたパーレビ国王が追放される前に特注したという絨毯を二枚購入したことである。なんと一枚が一〇〇平方メートルで、もう一枚が三〇平方メートル。大きいほうは運ぶのに五人がかりという途方もないものだった。この二枚を売って大儲けしようとしたのだ。

もちろん K とて、売り先の目処もなく闇雲に買ったわけではなかった。ある会社が引き取るという内諾を得ており、違約した場合は K に一〇〇〇万円の違約金を支払うという契約書まで交わしていた。ところが、契約は破棄された。実際に絨毯を目のあたりにして、その会社が肝をつぶしたのである。私も見たが、とにかくとてつもないもので、そんな大きい絨毯を敷く場所があるわけがない。その後

も、バブルで大儲けして浮かれていた広告会社を買ってくれるという話もあったが、広告会社は途中で正気に戻ったようで、「そんなもの買ってもしようもない」といい出し、話は立ち消えになってしまった。

巨大な絨毯を抱えて困り果てた K は、最後にはイラン人に買い取らせようという計略を練った。相手が相手だけに、拳銃持参で商談することまで考えたようだ。しかし冷静に考えてみれば、絨毯と一緒に命まで取られかねないということで、話は沙汰済みとなった。結局、絨毯は売れず、しかも投資した株もバブル崩壊で暴落した。女房が五〇〇〇万を元手に始めた画廊もうまくいかず、**K は無一文**になってしまった。

もちつけないものをもったらどうなるかの典型的なケースだった。ヤクザやアウトローなら最初から金の亡者になって荒稼ぎし、得た金が数十億だろうと、酒と女と博打で綺麗に使っておしまいになる。だが、堅気、ことにインテリは最初からは金の亡者になれないが、大金を握った途端に亡者に変貌してしまう。**その金を元手にしてさらに儲けようとするのである。それが逆に苦勞を背負い込むことになり、結局は金に殺されることになる。**K の辿った道は、その典型だった。

K の会社は倒産し、借金も残ったままになった。K は今成田空港の近くで有機農法の野菜をつくって生活している。納まる場所に納まったということなのだろうが、バブルに翻弄された男の一人であった。問題の絨毯は K が税金を滞納したために国税局に差し押さえられ、一〇〇〇万で競売されたそうである。

その点、「バブル紳士」たちの金遣いは豪快で単純なものであった。それぞれ豪邸や一流ホテルのスイートルームに住まい、毎晩のように銀座や六本木の高級クラブで豪遊する。ギャンブルも凄かった。私も時々同行したが、とにかく賭け方が桁外れなのだ。

「絶対間違いない」という厩舎情報が入ったというので、ある人物と土曜日の早いレースを賭けに府中に行ったときのこと。その人物に「若い衆を一〇人ほど都合してくれ」と頼まれていたので、ちょうど一〇人チンピラ連中を連れて行った。

すると、その人物は若い衆に二〇〇〇万円ずつ渡し、都内の場外馬券売り場にバラバラに馬券を買に行かせた。そして、オッズが変わるのを楽しそうに見ていた。オッズを見ながら、「自分でもノミ屋に別に二億円分注文してんだ。今日の実入りは大きいぞ」という。私は啞然として、その横顔をしばらく見つめたままだった。しかし、馬に「絶対」などあるわけがない。狙ったサラブレッドは馬群に沈み、**二分足らずで四億円をすった**。さすがに「やっつけられんなあ」と頭を抱えていた。

夜の銀座でも、この調子だった。ホステスたち全員に一〇万円単位のチップをはずんだ後、ドンペリや高級ブランディを開けまくる。そして、宴が佳境に入ると、一番気に入った女に「お前、何か欲しい物あるか？」と尋ねる。浮かれた女が「ベント。一〇〇〇万くらいの」と答えると、平気な顔で「そうかそうか、ベントが欲しいのか。明日、ホテルに取りに来い」女が「ウッソー！ 信じられない」と媚び、しなだれかかる。ホテルを訪ねた女が、一回のセックスと引き換えに一〇〇〇万円を手にして大喜びしたのはいうまでもない。万事がこの調子で、豪儀なものであった。

ただし、私も含めて、バブル期に豪遊していた連中は、店の側から見れば単なる一過性の、いつか衝から姿を消す客にすぎなかった。バブルの頃に京都の祇園のクラブに遊びに行ったときに、ホステスたちが「バブル紳士」のことを話題にして、「あの人、いつパクられるんやろ。**それまでにしっかり金吐き出させとこ**」などと言っていたが、私らとて全く同じように見られていたはずだ。水商売の連中はしたたかである。結局、バブルで一番潤ったのは、夜の街の女たちだったのかもしれない。